

おぼろの義  
穴め

合本

367-G59㊦



1200500740187

217

9



始





367  
G59

後家の誠め  
おさんの穴

合本





後家の書入



後家の誠め

孤閨寒人編

劈頭第一記して未亡人の箴と爲すべきものハ川柳氏のいハゆる「石塔の赤い信女が復  
 孕み」の言是れなり凡そ家を亡し嗣を絶ち一家親類をして悲嘆の淵に沈ましめ流離  
 の道に迷ハしむる千般の奇運萬般の悪事只此箴言を忽諾にするよりして起るもの其幾  
 百萬人なるを知らず今此篇に記して未亡人の戒となすべきもの其數億のみならず然れ  
 ども未亡人の淫事よりするの戒め最も記せざるべからず最も先きにせざるべからず請  
 ふ先づ是より説かん

老少不定色即是空翠帳風塞ふして孤鸞鏡に泣く昨日共に偕老の誓ひ言猶ほ耳にあり一  
 朝何事か百年の永訣をなす是れ新に夫を亡ふの時なり此の時や其若きと老るとの差別  
 なく屍の枕にすがり屍の上に伏し共に死して九泉の道を同ふせざるを恨み獨り生きて  
 人間界にあるを嘆す以爲らく天下ハ廣矣といへども復た一人の男子なし人間多矣し



と雖も他に一人の夫なし已みなんくと其數日を過ぐるや佛燈影暗ふして香爐烟絶  
 ね去る者疎しの情漸次にして生ず是に於て親戚相譲りて謂らく彼れ年猶や嫩く老先未  
 だ遠し獨り數十年の孤園を守るの恐らく難んずる所なり如かず寧ろ公然として再  
 計らんには尙ほなまじいに言を操を守るに托て後ち耻を江湖に晒すに勝ると乃ち一  
 日未亡人を最も親き親戚の家に招き之に説て言ふ主公死してより操を守る久し誠に好  
 みする堪たり然れども御身猶は春秋に富む今よりして操を守り通ふさんは某の忍びざ  
 る所御身の能く操を守り得給はん疑ふべうもあらざれ世の指さき五月蠅ものな  
 れば寧ろ公然に再薦するところよからめと勸むるを未亡人の否みていなく斯る事を言  
 ひ給ふな古昔の貞女兩夫に見えずと云ひたり況て死せる夫を忘れて他し枕と共眠せば  
 地下に行きたるの如何なる面もて死せる夫に逢へるべき最早かゝる汚らひしき事言  
 出し給ひず妾の縦令ひ獨り寝の閨淋しきもかまひで二重襦は袂ざるものを最と立派  
 に答へぬれど一歳も過ぎ木々の嫩葉麗に櫻の笑ひ桃の媚び人の心も春景色自然と浮立

つ頃に至り亡き夫の石塔に蒸す青苔の拂ひもやらで自己が顔の白粉の朝に粧ひ夕に飾  
 り剪らんとほでに思ひ詰たる烏羽玉の黒髪の日毎に結び梳り夫の墓參に托てかくし男  
 に逢へち嶋通ふ千鳥にあらなくも人目の關を打ち越して幾夜寐さめの淋しさを慰め初  
 めしが病み付にて終に醜聲外に洩れ曩に立派に答にたる其舌の根も乾かぬに耻を江湖  
 に晒すもの世の未亡人の通常なり廣き日本に能く否らざるものと否るものと何れか多  
 く何れか少きや嘆ずるに猶余りあり

凡東京の商家などを初めとし人を仕ひ居る店なきにて主人の身退るや親類に世話する  
 人あるにもせよ一家の權は未亡人の手に屬くなり斯くなりてより番頭正直忠實の人た  
 らん或の可なり左れ正直忠實の人少ふして不正不忠の人多し於是か若し大  
 姦の者の表面に正直忠實を粧ふて未亡人を瞞し并して親戚を欺き小姦の阿諛佞媚力  
 めて未亡人の心に副ひ意に陥り終に其閑塞きに乘じ色情よりして先づ未亡人を已れが  
 中に入る未亡人にして閨門正然れば即ち可し然ども此も亦正からざるの多く正



しき稀なり故に夫死して歳も経聞淋しき折りから番頭の正直忠實の様を頼もしく思ひ能く心に副ひ意に諂るを喜び次第に優き言をまかけるなんめり番頭の好き鹽梅なりと大姦の愈々大忠の如く小姦の益々阿諛佞媚終に怪しき枕を重ねる事となしぬ姦番頭の百方心を盡して未亡人と通ずるや豈に唯り未亡人の色香を慕ふ爲めならんや別に大に爲めにする所あらんと欲するや知るべし然れど女の淺ましき事に夫れまでへ看に到らず只上邊の忠なるに従順なるを見て二なき者と思ひ諸事番頭の言まゝに成すべし是れ家を亡すの第一着なり未亡人已に掌中に落つれば漸く奸望の芽を顯し先づ未亡人をして其親戚故舊の世話するものを疎遠にせしむ是れ姦人の主家を亡す第二着なり凡そ色情の爲めに恩を忘れ義を棄るに至るもの世上の常なり況して親戚故舊などに於けるをや未亡人已に姦人の掌中に落れば已れも亦た親戚故舊などの常に出入して其怪き容体を知られん事を眼上癩思ひ成丈之れを疎んずるに至る此の機に乗りて姦人の有る事となき事とを構造して未亡人や親戚故舊の交誼を隔つ是れより其家の孤立の形

となり家亡ぶるの勢成る」姦人已に思まゝに策成れば乃ち先主の遺孤を放ち已れ其家を奪掠んとするの途に運ぶ是れ姦人の家を亡す第三着なり遺孤已に成人る者なれば或之を放蕩無頼に陥れ以て家を讓る能はざるの口實とす遺孤若し幼弱ければ之を他人に成育せしむるの道を圖り已れ或の後見の名を以てし或の公然主人の坐を繼ぎ終に志望を遂げて主家を已れが掌中に奪ふ此に及べば姦人の癖として業を盛にし後を討るを思はず日に遊蕩の慣を長じ家にあれば酒に耽り外に出て色を漁り生業を以て事とせず家規亂れて主威行われず所謂若衆の主を傲ふて私に花柳の地に遊び丁稚小僧も亦た天浮羅の立喰に賣溜の錢を偷み日ならずして花主悉く離れ融通總て塞る此に至て先祖より人に知られし暖簾も空く朽ち果て家藏も亦た人の者となり昨日までも下女下男に崇められ内儀さん／＼と呼ばれしも今裏店の山の神と成り下り憐れ若旦那と呼ぶべき子も或の車夫の仲間に入り或の食客の身と成るに及ばしむ是は此れ江湖未亡人の家を失ふ覆轍にして今新聞紙上に出づるもの之に等きもの比ふ是れなり然



此未亡人の第一慎むべきは淫事にあらずして何んぞや  
 編者曾て一九が膝栗毛を讀む其中後家の役者買ひに心を奪はれ彌次をして臆を落さし  
 むるところあり以爲らく巧に後家の蕩樂を盡す様を寫すと今此編を筆するに當り思  
 ひ起して一言を付するに至れり凡そ今の役者(昔も或は然らん)の藝を賣るものより愛  
 嬌を賣らんとするもの多し愛嬌を賣らんとするも世の淫肆女子不貞後家を誑さんと  
 欲するの心なり然れば不貞の後家役者に心を傾けて家風廢頹の芽を開くもの少しと爲  
 さず是れ亦た慎むべきの大なるものなり已れの役者に溺れ金を費すは僅少なりと云  
 へ共家風の亂れに斯る事より初り上を學ぶ下の習にて丁稚小僧に至る迄も氣儘勝手  
 の事を爲すに至り主人たる後家どのも我身を回顧して深く尤むること能はず終にのちし  
 き家の大事にもなりぬ可しかく云へ人あるひに云へん後家とて漫に役者買ひに耽る  
 事難からん一人にて戯場に至る位のものなれば因より役者に費すの金もあらざる可  
 ければ姑く置き苟も役者に金錢を費す位の身代の人たらんに必ず下女もあるべく子兒

の伴もある可く或は親類舊故の伴もあるべし之を差し置き如何で役者に戯るゝを得べ  
 けんやと是れ未だ其内幕を知らざるの誤なり試に説かん先に云ふ如く今の役者の藝を  
 賣らんとするものより愛嬌を賣らんとするもの多し故に芝居茶屋の女將軍と謀て爲め  
 になる後家どのにてもあらば之を引懸けんと思ひ居る事ハ常なり然れば後家どの、芝  
 居見物に行きてひぬきに爲る役者あれば役者も船臺上より看破し茶屋の女房も様子を  
 知り小便などの用にて歸り來る時色々話しかけて其役者を譽めろやし幕の間などに  
 之を招かしめて私に慾を透げしむる事を得べしゆゑに縦令同行の人あるも後家どの  
 に心あれば容易に忍び違ふ事出來るなり心して役者に溺れ家の滅亡を來すなかれ夫死  
 して後の未亡人即ち其家の主なり一家の興廢存亡其身にかゝる故を以て唯り淫事の慎  
 むべきのみならず家政の心を留めざるべからざるなり試に其最も意を注げざるべから  
 ざるものを列ね擧げなば  
 世人をして夫在るの日より淋しく成りしと云ひしむべからず凡そ家の淋しく成りし事と



云ふは是迄親しく出入せし人々の疎々敷爲ればなり人の疎々敷爲るは是れ必ず何にか其起り無き事にあらず總じて女子と云ふものゝ吝がちのものなれば交誼などより人情を欠き人に彼の家の主人の達者なりし日の好かりしが後家の身代となりてより物に吝にして交誼も損のみなりなご、云へるゝに至り是より次第に淋しき家となるべし」又家とて下々をして旦那の在せし時より悪しと云ひしめぬ様氣を付けべし總じて女房の悪まれ役なるに旦那死してよりの又旦那の分も背負へば餘程心せざれば悪く云へるべし悪く云へぬ様にするの左程六ヶ敷事にもあらず只憐みの心と恵の心が肝腎なるべし憐みの心と他ならず心なく叱り使はず下女にもせよ下男にもせよ小僧にもせよ先人の家に奉公する位にて幸なき身なり我の人の使ふ程の幸ある身なれば左なきだに苦樂の差別の大なるべし然るに之をも思はず金を出して備ひたるなれば何程に使ふも勝手なりと心得るの情を知らぬ人と思ふべし是を然に思はず能く其幸なき身を憫然と思ふ心を出さば自然と手荒く使ふ事の出来ぬものなり之れを憐み心と云ふ又

手恵の心との俗に心付けが肝要と云ふ事にて俚諺にも長者の萬燈貧の一燈と云へば已れ少しの物と思ふとも之を與ふれば貰ひたる方にて其喜悅如何計りならん故に屢々心付けて少しのものにても恵まば二なき主と尊まるべし主人死して后此憐と恵の二の心なければ必ず一家の中治まらず皆陰にありて悪口を云ふべし心せざるべからず上の如く云ふものゝ只吝りなるを嫌ふ爲め緊めくゝりもなくして尙更家の亡ぶる元となるべし夫ありし日の女内内の事さへ治むれば大抵濟むものなれど夫死して后内も外も一人の身にかゝれば是までの心にて迎ても家の政事を執る事の出来ざるべし悴の后を繼ぐまで已れ男となりし了見にならざるべからず左れば一より十まで心を付けて居ざれば内の事亂みやくと成りぬべし

夫死して未だ家を統轄し業を営むに足る程の嗣子あらざれば先當分嗣子の成人るまでの表向の事の成り丈け手を出さず嗣子の成人を待つが大丈夫なり女の何程賢きとて外の事に疎きものなれば多くの人に欺かれて損する事あるべし、ゆゑに已れの只嗣子



の成人を待つ心にて身代を増さんと思ふ慾心を起すなかれ身代を増さんと思はざるも身代を減らさぬ様にすれば自然と身代が増すものなり古言に一利を起さんより一害を除くと云へる事あり害を除くは即ち利を起すなり身代を減さぬは身代を増すに均しかまいて慾心を起すなかれ

又手後家の再び嫁ぐ可きか飽までも操を立て通すべきかの一段に至りては編者頗る其判断を下すに苦むなり若し道德學の上よりして判断を下したらんに一言にて定まり居るべきなれど一步を退きて考ふれば一概に道德上の言のみを摸範とも爲し難きものあり百人が百人ながら道德上の言を守り通せるものならんに此上もなき事なれど凡夫凡婦の事も道德上の事のみにては却て大なる恥辱を惹き起すに至る事を免れざるなり譬へば悪事の爲すべからず善事の爲すべしと云ふ事の百人が百人皆な知りながら善事を爲す人の少く悪事を爲す人の多き如し然れば善者が野暮固氣の説を止め更に判断を下して云ふ凡ろ夫死して未亡人年三十を超はざれば再縁する方よかるべし三十以

上の人の嫁するに及ばざるべし是れ三十以下にては嗣子の成人をまつとも行先き長く又三十以下より六七十年の間空聞を守らするは造化も本意なく思ひ給はん此云の貞女兩夫に見ずの古訓を破るものと尤むべけれど實際上より見れば四十以下の後家の再縁を計る方實に當人も苦を免れ他にても便なる處あらん是れ男女情合の事より言ふにあらず其家の治り方より看來れるなり是れに翻て已に三十を超ゆる上から嗣子の成人も左程長きにもあらず一家を治むるの思慮も定まる年なればせひに操を立て通すべき者なり且つ三十以下とても操を立て通さるれば夫れに過たる事あらずかしらへ各自の心の中にあらん

是れまで説て來りしは多く中人以上の身代に付ての心得なり其故は中以下は後家を通ずも何を爲るも衣食住の三の者に迫るれば已むを得ぬ場合多く雛形通り他で言ふ様にへ行かざるべければ是に向ひて賣るも益なきと思へばなり

獨りもの、後家の遠慮なきものも人の遊びに行くを好むものなり又年長けて后の多



く世話づきと爲るものなれば遊びに行く人も心置なく諸事を頼み爲めに茶など呑み倒したり飯など食ひ倒し案外に暮し向のかゝるなり然れば獨りものなりとて心を免るし居なば困き時に逢ふべし是れハ編者が目當り屢々見る處なり  
 獨りもの、後家年長けてのちハ只佛いぢりのみ爲して種々と名をつけ或ハ合葬料など、云ひて寺へ金を收める事のみを善き事と思ひ居るハ凡婦の淺ましきと云ひ益なき事に金錢を棄つると云ふ可し今佛に金を費すの馬鹿くしきを説くも遽に諭しがたければ現在の事を以て説き示さん今獨りもの、後家急に病に罹り親戚の來り看護るものなれば誰れか藥を煎るものぞ佛壇の胡麻牌能く之に堪へんか今近隣に火起り什具を見る見る焼けんとす此時寺の僧徒飛び來りて什具を出さんか其他何事も寺に收めし金の用をなす事なし而して其何れの時に何の要を爲すやと問へば死後回向をなすの一事のみ若し寺に收むるの金を以て之を近くの窮者に惠み親近の人に費さば病あらば來つて藥を煎ん往て醫を呼ばん火起らば其身を爛し其衣を焼くも我がために什具を出し火を救

んん現在の事斯の如し余ハ推て知るべし然れば少しく省みて佛いぢりに費す金を以て近くの人を結ぶべきなり

總じて繼母と後家ハ取分人の口の五月蠅ものなれば心を注げる上にも心を注げざれば忽ち人の誘起るものなり其實なれば誘りも恐るゝにハ足らずと云へば誘なからんにハ勝るべし然れば後家となる上ハ已に世を離れしも同身なれば成丈々世間に行かす看物山遊も控たきものなり斯く云ハ自主の世の中に似逢ぬこと、尤めん人もあらんが我國今日の有様にてハ未だ氣儘に出行くのみ自由自主の本旨なりと稱められぬ事あり左ハ云へ編者とても家にのみ在りて抹香いぢりを爲すべしと勸むるにあらず只心して世間の誘を受けぬこそよからめ

未亡人の一大務は外にあり是れなん嗣子を成育するの事なり凡そ嗣子を成育して善き人と爲すも悪しき者と爲すも亡家の子と爲すも興家の兒となすも皆母の育てかたにあり未亡人の頼みと爲すものハ只此嗣子にあるべし然るに育方宜しからずして不孝



の子となり善からぬ事を覺れたらには數年待ちに待ちたる甲斐もなく老て死ぬ迄無爲月日を嘆ち悲むに至るべし誰れも知りたる孟母三遷の教と云ふ事あり餘り易き事なれど此書の婦女子の爲にものせしなれば試に説かん孟母の孟子を育つるや其住居の好からん爲めに孟子の遊びかた惡しとて三たびまで家を移せし事もあり又或る時猪肉を商ひ來るものありしに孟子彼れは何んぞと問ひければ彼れの大層甘きものなれば御身にも食させんと感れしが再び考へけるにわれと云へ子に嘘を教ゆるは母の道ならずとてやがて眞に猪肉を買ふて食べさせけりと又孟子或日家塾先生の處より歸り來りしに母の折しも機を織り居たりけるが孟子に向ひ何にしに歸りしやと問ひければ孟子答へて某も學問稍成しかば先生に賸賸歸り來りしなりと云ふに母の側は剪刀とりて已に半を織りたる布を惜げもなく剪り離し扱て戒めけるに此布も末の行く處まで織り了れば適れ衣物と爲る可きを今かく半途にて斷ちたらんに終に無用の品とならんと孟子を再び先生の下へ追ひかへせしとなん左ればこそ斯る名高大賢を出せり今の人縱令

此の眞似の出來ずとも是れにて思ひ當れば嗣子を育つるの六ヶ敷きを覺る可し

既に三ツ子の魂の百迄と云へる事あり甘しと云ふ可し世の人未だ小兒なりとて甘やかし育て終に其手に乗らぬ者と爲し後に悔るもの多し縱令小兒なりとて惡しき事決して爲さしむべからず慣性となれば長じて改めんと欲するも難きものなり小兒の中に已に中角を顯へす様に儼格に育て徒ら爲す時何程徒をさするも何事も小兒なりとて寛假する事なけれ次に子を看る事親に如かずと云へば能く其長ずる處を看て學者なり商人なり何にもあれ一つの専門を收めさすべし弱冠に及べば最も肝腎なりとす此時や一身を過るも一身を起すも皆是に定る故に母の行ひ正からず其子を教ゆるに足らざれば終に遊蕩に傾き不孝の子となるに至らん未亡人の務め是れを以て第一の難事とす

予の前條に三十以下の後家の再嫁を許せりされど茲に權謀の場合にて素より再嫁の好みすべからざるに云も迄もなし實際上已むを得がたきの事と知れ是に付き編末に一言



し置かざるべからざるの夫の死せしにあらざりて離婚せしもの、再縁の尙更輕忽にすべからず他日再び回り逢ふ事ある者なり今貞婦の一話を記して篇を結ばん

李妙恵と云へる女、支那の揚洲の人なり其同郷の廬と云ふ人の女房と成りしが廬の故ありて西山寺と云ふ寺に入りて人に遇ふ事を禁じたりし。折しも同名の人に死せし人ありて父母初め廬の死せしものと故得居たり數年を過ぎ豪商の謝と云ふ人李の美人を聞きて婚を求めしかば父母金に心を傾むけ再離を苦勸しに李の二度迄も縊れんと覺悟せり然るに李の生の親も種々と諭し勸め止まず李の日夜哀泣げど止むべくもあらざれば終に枉て之を諾がへ謝の家に行けり李の左るにても種々と言譯なし下婢たらんとまで請ふて枕の伽を爲さざりしに折りから謝の出商人にて國へ歸る事と爲りしゆゑ已れに先づ船にて發し李の母と同船して後より來らん様云付け、り李のやがて泣々も謝の母と同船し途すがら金山寺の下に泊りしかば船を上りて寺を看物し僧に筆をかりて一詩を壁に題し其後に揚洲廬某の妻李氏題すと記せり却て説く彼の廬の志を得て大官

に昇り家に歸れば妻の已に人に賣りたりと聞き本意なく思へども詮方もなく其ま、後ぞへも嫁らず居けるが或る時用むきにて金山寺を過ぎ彼の詩を看。覺はず涙を垂れたりける此て有る可きならねば其詩を寫して心ぎ、たるものをして商人船の澤山泊り居る處に行きて小船に乗りて此詩を歌ひて上り下りなさせしに或船より女の窓を啓て喚ぶものあり其詩の何れより知りしやと問ふこれの揚州の廬舉人よりと答へつれば其女の驚て廬と人ふ人の已に死せる筈なり爾我を欺ならんと云ふに小船の人備さに眞を語りしかばそは我の夫なりとて互に示し合せ其夜船を以て李を乗せ逃れて廬の處に來り夫妻目出度再遇せり謝も怒りて見しが又感嘆して昔關羽逃れて漢に歸りし時曹操追はずして彼各自其主の爲めにすと云へりこれも亦其夫の爲めにするの貞婦なり拾置くべしとて追はざりしとなん



於と興さ焚ん火んの穴あ  
穴あ





惟此為



卑者

女之

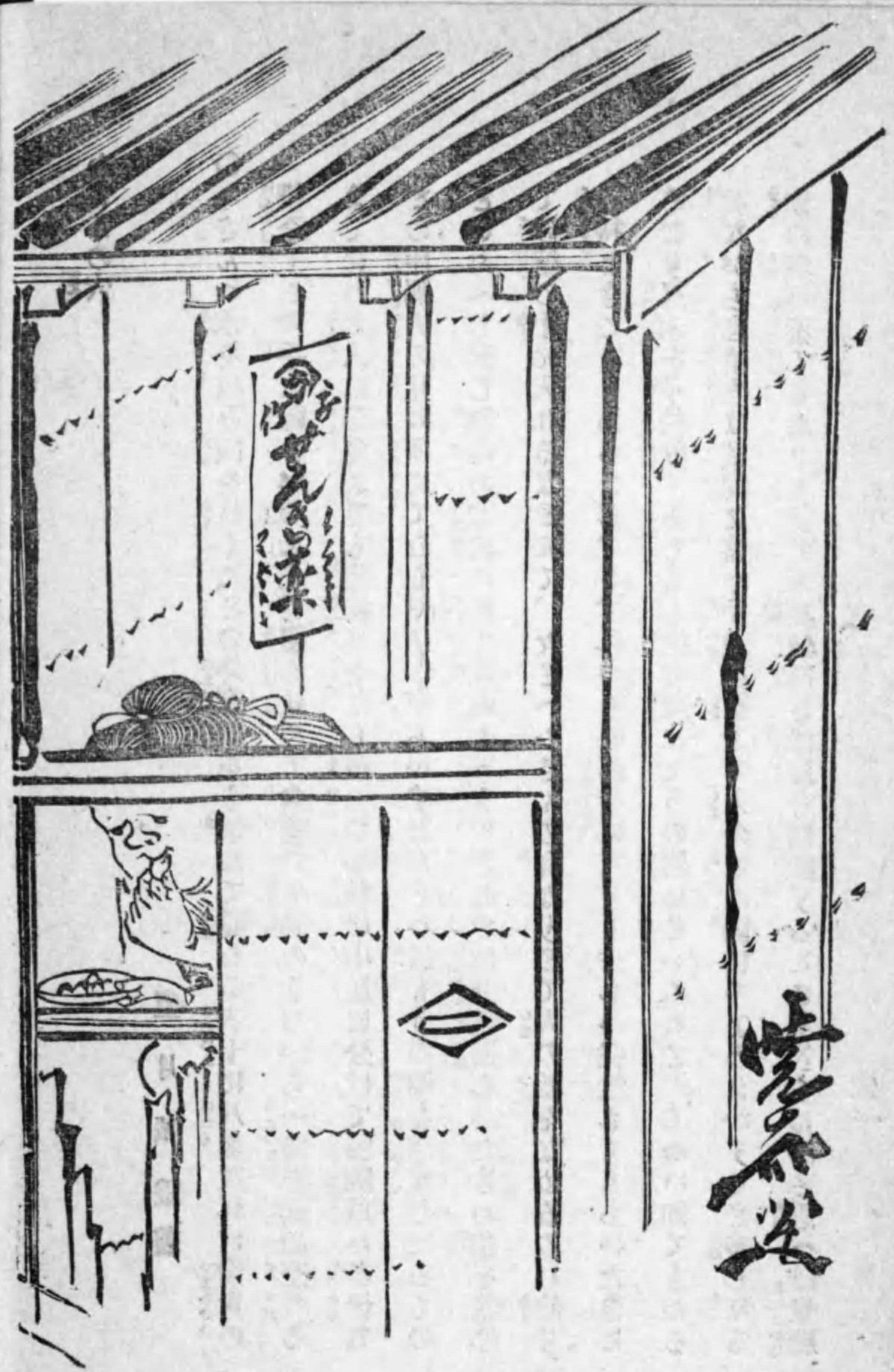
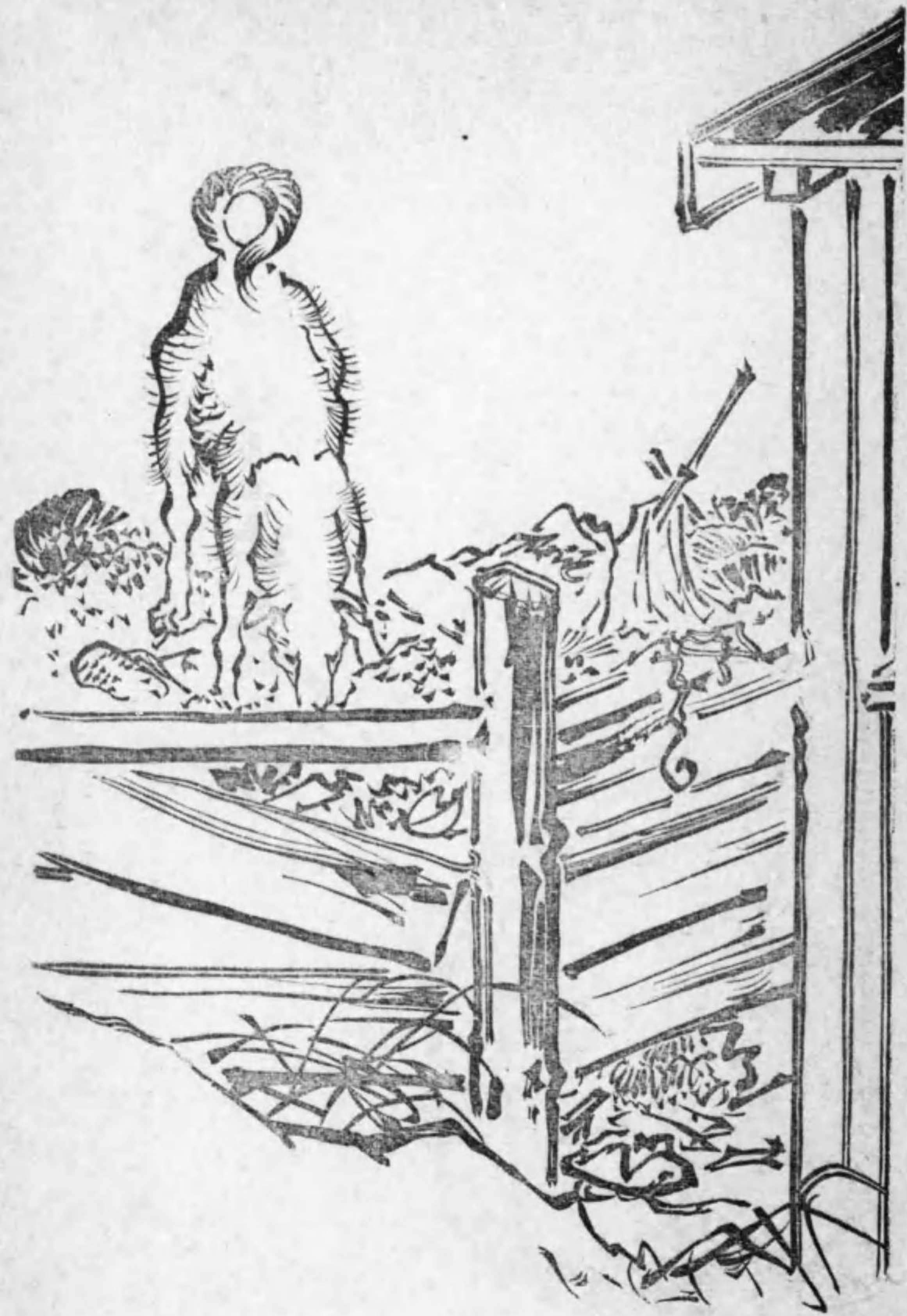


おさんの穴

望月誠藏著

○おさんの水を汲み飯を炊くことの外烹調をも兼ねて勤むる者十に八九なれば儉食の權全くその手に歸るがゆゑ先づ鹽梅見とて食物の半熟のうちから一摘を始め煮成るまでには念入に三度までも鹽梅見をなし最一つお負に小皿に分けて雪隠或は物置などの片隅人の見ぬ所にてむしや／＼やらかすなんぞの最もうの權を恣にしたるものといふべし但し尋常の儉食に見て見ぬふりもできれど何分見遣しがたき指をなめて砂糖の中に入れるなどにて、たどへおさんの身なりとて人の唾をなめるの餘り心持よきこともあるまじ、さすればその心持になりて少しの我慢してもらひたきことなり又水を子杓飲することも同じ理にてろの悪いといふことぐらゐり知てもぬる筈ながら怠惰者は茶碗に盛ぐ手数を厭ふて人の看ぬ間にちよろまかすこと多し斯る家の者へ忝くもれさんどの、臭氣高き齒尿を頂戴することもあらんかと思へば豈胸





茶室





将書集



のわろきことならずや

○使の途中近所のおさん仲間と道伴になるときほどかく互に主家の事を悪く喋るものなれどこれたゞ自分の恥をさらすのみならず何の利益にもならずこれが爲めに日間ざれて使の歸りおのづと遅くなれば果して主人の氣元わろく自分より求めて不首尾を醸すの理なれどそれに頓着もせずして喋るのゝ定めて其中に言ひれざるほどの甘味あるべし今爰にその模様を大略申さん お竹「もししくお松さんおまへの家でござうだか知らないが私の所でのそれなく人使の悪いことと云たら一つの買物をしなれば大層遅かつた道艸を喰つたらうのヤレこの大根の高價あの牛蒡の細いとそかくたゞの置きませんソレ雑巾をさせ麻をうめとなんば給金を出したからとてあんまりじやありませんかと云へばお松「それのおまいさんの家ばかりじやありませんよまた私の家で、旦的擲を示し氣よしで何にも擲ぬければ此は小指をなかく示して

あかにして人使のわるい上に主人風を吹かしてマゝはんとにサ何んぞといふとそれが奉公だうれが奉公だと云つて人を犬猫同様に思つてゐるのゝ何といましくしいじやありませんか、そして三度のお餚もろくなものゝ喰はせぬしなないのですよドン(午砲)おやもう十二時ですチー お竹「歸るとまた遅いとかぐづ／＼云られるのだレ行きましやう、さよなら お松「ハイさよなら、また今ばんお湯でゆつくりお竹「かならず今ばん」などといふは紋切形なれば若しおさんこの所を讀みたらんに必ず胸に針をうたるゝの思ひをなすならん

○買物の「ぼうさき」をはたらくなぎのことは最と悪いことにて正しく云へば立派の盗賊なり然るを自分勝手に「ぼうさき」ぐらゐの事、盗賊といひ入れぬこれおはんの一時のお慰みだなど心にゆるし最初一錢の額にて僅に一厘やらかしたのも次第に増長して二厘三厘となり終に焼芋二錢の額にて五厘もはねるもある、なんば芋が高いとて餘り少いといふところから尻が割れてさき／＼お拂ひ箱となるのゝ定法なれば愚



といふもなほ餘りあり又主家の米、味噌、醬油などを盗みて巳の家におくりなごする者往々あれど是れ又自分へのその慾に蔽はれて盜賊と名の附くほどのことには有るまじと思へども既に前にも云へるがごとく錢一厘盗みても又米一合盗みても同じ盜賊なれば深く恨むべきのことなりとす

○奉公人の根情として住込の當座へ万事に意を注げて朝も早く起き出れど段々馴れるに隨て事を忽にし朝も亦晏く起き甚だしきは主人の呼び起すも虚眠して更に返辭せず呼ぶこと三四回に至り始めて眼の醒めたる振して澁々と起き出れど主人の眼に全く寐忘れたるのと虚眠するのとは見分がつくも己の拙き根情を求めて主人に見せるに當るなり斯も一時おくりの怠情をなしたきものか

○おさんの冷飯をすつる心のほど如何あらんと尋ねれば自分のこれを喰ふを厭ふまのでことなりとの實に薄情ことならずや、さて冷飯をすつるも一度の費は些少なれどもこれを年中につもれば實に驚くべき大費となるべし昔の人には飯をすつれば眼

がつぶれるといふぬごしも功能ありしが今の生意氣おさんなどにはろの功能もあらざれば只ろの主婦の眼玉を要するのみ

○物の足らざるをばつぶやき餘りあるをバ惜氣なくこれを棄る等の奉公人根情にして主人の損害を患ふ者はすくなし今うの一例を擧げていへば物を煮るをり醬油、味噌の類を徳利より直に鍋の中に注ぎ若し誤て注ぎ過す時はこれに水を加へ而してその不手際を蔽んが爲め无益にこれを棄つることなどのごとし斯る不手際を防んに先づその適宜の分量を散蓮花或は玉杓子などにはかりて鍋の中に移すべし然すればその適度を誤ることのなればたび／＼示て被せても爲さぬところを見れば此位の事でもヤツパリ面倒だかえらん

○事馴れぬおさんの薪の數さへ多ければよく燃るものと思ひて徒に多くくべるものなれど夫れといふのも到底冗費を願ひぬより起ることなれば何一つとして油斷がならず誠に困つたものなり



因に云ふ薪を多くくべて却てもゑのわろき理の之が爲めに竈内の空氣の流中をわろくするがゆゑなり一体火のもゑる理の薪の中にある炭素と空氣の中にある酸素といふ二つの元素が互に結び合ふて燃るものなれば空氣の流通わろきときハ酸素もろれに隨て少きゆゑ燃かたよろしからず故によくこれを燃さんハ適宜くくべて空氣の流通をよくすべし

○おさんは食物を扱ふ者なれば身体の中特て手を清潔にすべきはづなるに中に便所に行つた後の手を洗ひぬのみならず甚しきハ朝起きたまゝ手を洗はずに食物等を扱ふ者もあれど夜間寢床にて頭をかき尻をかきろの他何處の厭ひなくかきちらし又ハ蛋風をつぶすこともあるべければ最も厭ふべきことなり又雑巾がけをなしたる後の手を洗ふ者も十人に十一人までいなく又これを不潔と思ふ者も少なければよく考へて見れば雑巾といふものハ誰れが家にて清潔の物のみ拭くものにあらず板の間や闕を拭くハ實は人の足の底を拭くも同じ又其上に何が落ちてゐるも計られ

ねば甚だ不潔きものなり故に雑巾がけをなしたる手にても亦食物を扱ふのハさらくゝふことはり申したし

○飯の給仕をなしながら頭をかくなごのことハどかくありがちのことなれば甚だ汚きことなれば給仕をなす者の最もたしなむべきことなり何故なればその頭垢自然食物の中に飛び入ることあるべければなり又常に髪を亂してゐるハその主人に對して失敬のみならず主家にてハまたろの客等に對して恥づべきことなれば常に必ずとりみださぬやうありたし然るをおさんなどハ髪をみだすも更にさしつかへなきこと、自らもるせごその甚だ誤解にて右の不興ハいふまでもなく既に前にも云へるがごとくおさんハ常に食物を扱ふ者なれば髪をみだすときハその抜髪いつか食物に交る患あるべし故におさんとても髪をみだしてゐてよきはづハあるまじ

○角膳、角皿、重箱その他總て角なる器を洗ひ或ハ拭くを見るにろの隅々までよく洗ひよく拭く者甚だ少なし故にどかく角小皿などの隅に食ひのこり物のこびりつきてあ





情  
景  
ノ  
一  
景





るを知らず客の前に出して赤面くことあれば總て角なる器を洗ひ拭きするにその隅のみを洗ひ拭きするつもりにて爲すべし然すれば他の部の自然と清潔になるべし又物を拭くに生拭にして拭目を遺すなど甚だ穢きことなれば濡布巾にて拭きたるをば再び乾きたる布巾にてよく拭きなほすべし

○晝間労働く者の夜に至り勞れいで、睡眠を催すも理なれを宵の中より居睡するが如き心の怠りより起ることなれば決して宜と云ひがたし又その甚しきに至て晝間にて坐れば直と居睡する者あり斯る者にその睡涎を流して睡りたる醜しき態を寫真にとりて見せたきことなり然すれ少し恥ることもあらんか

○奉公人根性として主人の眼前にてはその子供を丁寧扱へど見ぬところでの粗鹵に扱ふのみならず意にかなぬことあるときの子供の尻を拾り頭を槌きなどする者世間に少しとせず主人の泣聲を聞いて如何したかと問へば只今御自分で柱に頭をぶあてなされたの滑てころびなされたのと未だ小供の何も言へぬを幸ひ口から出ま

かせにいひまざらせざるの小供の爲めに害となるに云ふまでもなく智思なき小供を責むる心の底が鬼と云はんか將た愚なりとや云はん

○已れに過失ありて主人の之を叱る時自分の悪きこと全で棚に上げて却て主人を恨み甚しき主人に對して抗抵し或は罵詈り又呼ばるゝも更に聞ぬ爲して應答せぬことなぞ十人に九人まであることなれば定めておさんの法則にでもあることかしらん

○主人の用事を命けるも明と應答せず口の中にてぶつゝ小言をいひながらいやゝゝその用をなす者あれど主人より命けられたることは假令可厭でも爲さぬべならぬ也ゑいやゝゝ爲すよりも寧ろ勇んでなしたる方が自分もこゝろよくまた命けたる者も氣味よかるべきに斯く爲さぬ所を見れば白尻といふものゝ目方がよつばど重いと見へる

○總て物品を破損して知らぬ爲して濟さんとなすことゝ最も拙きことにて若し後日顯



ゐるゝときハ餘計に顔を赤くせねばなるまじ夫よりも寧ろの時疎忽の旨を述るこ  
ごころよけれ然すれば主人に於ても強て之を責むる理もなくたゞ後來を戒むる  
だけのごとにて主人のろの品物を搜索などする餘計の手數もなく當人も亦後日顯る  
ゝかと思ふ心配もなくして双方とも心持快しかるべし世間を見るに一日紛失したる  
品物の損れて芥溜の隅などより出ることの例もあれば思ひもよらぬ所より顯れてど  
んだ耻を受くることもあれば跣歩のがれハ決して爲すまじきことなりとす

○おさんの身としてかかみさんや、かむすさんの風態を似たがるは甚だ誤解にてた  
どひ頭から足の尖まで似たとてにあふものでもなく籠甲の櫛をさして煉さんごの根  
掛をかけたなり縮緬の衣を着て金巾の褶をしめるなんぞは竹に木を接たやうで尙さら  
醜しきゆる身分相當の風態を爲すはご好ましけれ

○手に臭氣の着くを厭ふて糖味噌を攪拌することをバどかく嫌ふものなれど誰れも知り  
たるがぶどく練味噌といふものハ攪拌せばそれだけ味の佳くなるものなれど若し

動ることを怠る時ハその味次第に損じ之に隨て臭氣を生して終にハ廢物となれば毎  
に怠らず攪動さずばならぬものなりたどひ手に臭ひつきても生涯とれぬといふもの  
でいなく石鹸で洗へば直にとれるもえ決して困惱ハなきはづなり

○雑巾垢をなすに多くハ生しぼりの雑巾を用ふれどこハ一時清潔に見ゆれど後にハ却  
て光澤を失ふものなればかたく絞りに拭きたきものなりろの生絞りにする原因ハと  
らハズヤツパー體力を吝むより起るならん





明治十八年十月六日  
同 十九年二月發行  
翻刻出版御届

原版人

望 月 誠

翻刻出版人

滋賀縣士族

石 原 干 城

淺草區聖天横町廿五番地

發 兌 元

東京南鍋町一丁目

天狗書林 兎 屋 誠



終

